

四 カシミアの『染め』の話

【トップ・先染め】

繊細なカシミアの染めは特別でリスクー

カシミア以外の、綿（コットン）や一般にウールと言われる羊などの糸を作る順番は、糸に紡績をした後に染（糸染め）を行うのが普通ですが。カシミアの場合は、『わた』を染めた後に『紡績』します。これを、『わた染め・先染め・トップ染め』などと言います。

カシミアは特別に繊細な素材なので、撚をかけて糸にしてから染めると染めの時間が長くなり繊細なカシミアにダメージを与えてしまいます。カシミア独特のあの柔らかい風合いにならなくなってしまう恐れがあるので、『わた』の時点で染めるのです。

染めは早い工程で染めるほどリスクが高くなります。もしトップ染めでワタを赤に染めたら、糸は赤、もちろん製品も赤ですね。一段階後の糸染めなら、糸の時点で赤にもブルーにも染められるのでトップ染めよりずっとリスクは低くなります。

トップ染のカシミアは染めの面で最もリスクのある染め方なんですけど、そんなリスクを取ってもトップ染めにしてカシミアの繊細さと柔らかさを大事にしているのです。

【カシミア独特の繊細な色】

繊細な繊維の光の反射で生まれる色合い

「カシミアは繊細で良い色ですね！」と、皆さんが言ってくださいます。

人は光の反射で色や影を判別しているそうです。物が平らだったり大きいと光は大きく反射して単純に見えますが、光の反射面が細かい程繊細な反射をします。カシミアはウールの中で最も細い繊維ですので繊細な光の反射で独特の色合いが生まれます。カシミアの繊細で微妙な色合いはカシミア繊維の細さが大きく影響しているのです。

【色で違う微妙な風合い】

微妙な肌触り

カシミア山羊の色は個体差があり、白、グレイ、ブラウンなどの色のカシミアがいます。これらの毛を生成りのまま使うこともありますますがほとんどは何らかの色に染めることになります。

羊毛のように色を抜ければ都合がいいのですが、カシミアの毛は繊細すぎて色を抜いて染色をすると傷んで風合いが落ちてしまいます。白やサックス、ピンクなどの薄い色に使えるのはホワイトカシミアの毛だけを使用します。

カシミアはまた繊細ゆえに色によって微妙な風合いの違いが生じます。ほとんどの人が気づかないぐらいですが、染の時間が短い明度の高い色に比べて、明度の低い濃い色は微妙に堅く感じます。

明度の低い色はブランやグレイの原毛から染めますが、濃い色ほど長時間煮つめることになって黒や紺など明度の低い色は淡い色に比べると柔らかさに微妙な差が出てしまいます。色落ちがしないように堅牢度を高くすると風合いが落ちるといように堅牢度と風合いは相反します。

風合いが落ちないように染める為に、日本の紡績会社は世界に先駆けて低温で染めるなどの特殊な方法をあみ出しています。この様な高度な技術をもってしてもいまだに色によって微妙に違いがでるのです。それを意識しながら最高の技術を持った染めの匠たちが日々努力しています。

全く同じカシミア原料の商品でも、色の違いによって微妙に風合いの違いが出るのも繊細なカシミアならではのと言えます。

【カシミアの深い色の秘密】

絶妙なブレンドにあり

カシミアの微妙な色合いはカシミアの繊維の細さにあると言う話をしましたが、もう一つ驚くことがあります。これを知った時はかなり驚きそして感動しました。

糸の状態で染めると染料の色がストレートに出ます。これを業界では『べた染め』と言っています。べた染めは単純な色になりがちです。

カシミア製品の各々の色は見た目では単色に思われますが、実際にその色を出すためには五〜六色もの微妙に違う色のワタをブレンドしてあの色のわたを作り、紡績するのです。もちろん各々色の糸の分量も異なりますし、何色も染めることになるので相当の時間と手間がかかります。

セーターを顕微鏡で見ると微妙な違いの色の繊維が混じっているのが分かります。

トップグレーの色にブルーが入っているのを見つけたときはちょっとした感動でした。